

文学作品の内容と構造メモ

*これは、奥田靖雄著「文学作品の構造」「文学作品の内容」(「国語教育の理論」むぎ書房所収)から、ピックアップしたものです。ぜひ、文献のほうを読んでください。文学作品を分析する上で、貴重な示唆を与えてくれるものです。

文学作品の内容について メモ

文学作品：人間の生活現象が具体的な形象としてえがきだされている。

文学は一般的なものを具体的な、個別的な生活現象のなかに形象化することによって表現する。これが文学的な認識、形象的な思考の特徴である。

教材として：どの作品を教材に選ぶかということは、なによりもまず、子どもにアクチュアルな問題をなげかけているかということを経準にしなければならない。ということは、作品の主題が子どもの生活に関係しているかということなのだが、子どもに問題をなげかけていない作品は子どももおもしろくない。おもしろくないどころか、子どもは理解しない。

文学作品の読み：感情＝評価的な態度でいぞめされたことがら、したがって形象を情緒的に知覚し、その情緒的な知覚を土台にして、作品の主題と理想とをあきらかにしていくのである

文学作品の内容は、なによりもまず、絵と感情なのであるから、それを情緒的に知覚しなければならない。

作品のなかにえがかれてある生活現象が、読み手によって情緒的に知覚されるなら、「ことがら」と「感情＝評価的な態度」は、その指導＝学習過程においてきりはなすことができないだろう。人間は具体的な生活現象に感動しても、概念には感動しない。したがって、文学作品のよみにおいては、「ことがら」の知覚なしには感動をよびおこすことはできない。また、形象の美的な特質から、感動なしには「ことがら」の知覚はおこらない。

文学作品のよみの指導＝学習過程は、基本的には「ことがら」と「感情＝評価的な態度」とをうけとめる第一の段階(情緒的な知覚の段階)、「主題」と「理想」とをつかみとる第二の段階(論理的な分析

の段階)にわけられる。

形象：文学作品の内容

ことがらとそれにたいする感情＝評価的な態度とからなりたっている
つねに個別的なもの(ことがら)と一般的なもの(主題)との統一である
「ことがら」と「主題」、「感情＝評価的な態度」と「理想」からなりたっている

ことがら；作品のなかにもちこまれている人間の生活現象＝個別的な生活現象

知覚できる。

ことがらの知覚は、作品の内容としてえがきだされている生活現象をあたまのなかに再生産していく想像過程

たまたまおこった生活現象の機械的なうつつではなく、同一のグループに属する無数の生活現象の典型である。それ自身個別的なものであるが、ほかの生活現象と共通なもの(したがって、にかよった無数の生活現象のなかにくりかえしてあらわれてくる一般的なもの)をうちにふくんでいる

主題：ことがらの一般的な表現＝生活現象に内在している一般的なもの(本質的な部分)

生活現象の一般的な側面

生活現象の本質

知覚できない、理解しなければならない。

主題の理解は、再生産された生活現象を分析して、本質的なものをえぐりだしていく思考過程

作品内容の主題をつかむということは、生活現象のなかにはたらいっている法則的なものの確認を意味している。

作品の主題は複数(主要なものと副次的なもの)であって、いくつかの主題の相互関係をあきらかにしながら、それらの統一性をつかむ必要がある。主題の統一性は作品内容の理想(基本的な思想)によってたもたれている。作品のいくつかの主題は、作品のもつ思想性によって統一されているのである。主題の体系は作品の理想を明らかにすることなしには確認できない。*

感情＝評価的な態度：文学作品はつねに人間の性格や行動、社会的なできごと、とりまく自然現象などをえがきながら、それらを肯定的に(あるいは否定的に)、うつくしいものに(あるいはみにくいものに)あつかって、人々の理想(ねがい)をいいあらわしている

「感動」というかたちで直接的にとらえられる

理想：えがきだされた生活現象に対する感情＝評価的な態度は、志向性をもった思想とむすびつき、それにうらづけられている。・・・この種の思想のこと
感情＝評価的な態度をつらぬく基本的な傾向
作品の感情＝評価的な態度をささえて、その背景によこたわっている思想が、作品の「理想」である。

主題と理想

文学は法則的なものを形象のなかに具体化することによって、「理想」を表現しているのである。・・・作品の主題というものは生活現象における法則的なものである・・・
・。こうして、作品の「理想」は作品の「主題」だということになるだろう。作品のなかにえがかれている生活現象が作品内容の客観的な側面であり、それにたいする態度がその主観的な側面であるという・・・規定は、きわめて機械的なわりきりであって、条件的にのみゆるされるだろう。

作品の「理想」は、いかなる生活現象をえがきだすかということのうちに、したがって主題選定のうちにすでにあらわれている。それゆえに、作品の主題を規定する公式のなかに、作品の理想がはいりこんでくるだろう。・・・主題は作家がえがきだしているものであり、理想は作家が表現しているものである。

・・・「主題」と「理想」とをおなじものだとみることにはできない。作品の「理想」には生活現象のみとおしがあたえられている。文学作品は、その「理想」とおして、生活現象の真の意味をつたえている。しかし、「主題」は生活現象の本質をさしだしているにすぎない。

もっとも感動的な場面に作品の「主題」と「理想」とがかくされている。

・・・文学は、うつくしいものをえがこうとすれば、真実をえがかなければならない。文学においては、真はつねに美なのである。理想の規定ある公式のなかには、主題がふくまれている。

・・・「ことがら」と「感情」とが形象によって直接的にあたえられているとすれば、「主題」と「理想」とはその形象の底をながれていて、形象を分析することなしにはあかみにでてこない。

分析のあり方

・・・作品内容である形象を部分にくだいて、部分が全体のなかではたしている役わりをあきらかにすることである。たとえば、登場人物の履歴や行動や顔つきや話しぶりなどをとりだして、その人物の性格をあきらかにしながら、この人物によってひき

おこされる事件の原因、本質、社会的な意義、みとおしなどをあかみにだす、といった作業。

・・・分析的な段階は、第一のよみの段階に矛盾するものであってはならないばかりか、第一の段階で獲得した情緒的な知覚をいっそうゆたかなものにたかめていかなければならない。

・・・第三の段階は、生徒による表現よみの段階である。・・・「主題」と「理想」とを理解したもののみが、「ことがら」をゆたかに想像し、ふかく感動する。第三の段階での、論理的な理解にささえられた作品のよみは、感性と理性との完全な統一として進行する。

人間の生活現象を多面的に扱う（背景との関係？）

個性をもったひとりひとりの人間がその（社会生活の）なかにどんな役わりをもつてあらわれてくるか、しめさなければならない。また、文学は人間の性格をえがきだすのだが、その性格というものは、社会的な生活のなかでかたちづくられるし、かわりもするし、まさにそのなかで自己をあらわすのであるから、その社会的な生活をもえがかずにはすまない。つまり、文学は、社会的なできごとをえがくばあいには、そのなかでうごいている人間の性格をしめさなければならない、人間の性格をえがくばあいには、社会的なできごとの舞台のうえでそれをしめさなければならないのである。

理解のあとの知覚

ある文学作品の存在意義は、特殊な生活現象のなかに一般的なもの（法則的なもの）をみだしているということにあるのであって、この特殊な生活現象を理解しなかったら、文学作品の内容を理解したことにはならない。「ことがら」を理解することを「主題」を理解することにすりかえてはいけない。主題の理解は、論理的な思考によってなされるが、ことがらの理解には知覚と感情と思考とがおりまざっている。主題を理解したあとでおこなわれる「ことがら」の知覚過程は、はじめて作品にぶつかったときにおこる知覚過程と質がちがっている。それは理性的な思考過程と溶け合っているばかりではなく、知覚過程そのものがいっそう正確である。

主観的な側面をおしえる教育的な意義

・・・うつくしいもの（自然の美や真に人間的な関係の美）をうつくしいものとしてうけとる感情を子どもの心の中にそだてるということである。・・・文学教育は、その形成におおきな援助をあたえることができるのである。すぐれた文学教育でそだてられた子どもは、この美の感情にささえられて、生活現象を評価し、みずからの行動を統制するだろう。

文学作品の構造について メモ (未完)

一次よみと二次よみ

一次よみは教師の範読（表現よみ）である。・・・生徒はイントネーション、間、リズム、メロディなどの表現手段を知覚することによって、「ことがら」と「感情」とをとらえるのだから、教師のよみは正確に表現的でなければならない。二次よみは一次よみで獲得した情緒的な知覚をたしかなものにする目的でおこなわれるが、それは教師か生徒かがそのときの状況にしたがっておこなえばいいだろう。・・・

*主題の主要なものとの副次的なもの

・・・作品内容の体系の中にはいりこんでいるひとつひとつの形象の主題をあきらかにして、その基本的な主題を具体化する必要がある。あるいは、ほんたいに、部分的な主題をひとつひとつあきらかにしながら、作品全体の基本的な主題を一般化しなければならない。

他方では、ひとつの作品のいくつかの主題のあいだには、主要なものとの副次的なものとの関係がある。つまり、作品は副次的な主題があって、主要なものとの副次的なものとのあいだには複雑な関係がある。たとえば、「カヌヒモトの思い出」のなかで「ちいさな子が夜店でどろぼうをはたらき、おおきな子がその子をつかまえて、いましめ、いたわる」というできごとがこの作品の中心的な形象をなして、その主題は「ぬすみをはたらいた子にたいする寛大さ」と規定できるが、そのまに「女の子のわたしが夜店でくしをかうために、カヌヒモトとなえながら、くしの歯のかずをかぞえる」という場面があって、状況をしめす副次的な形象として中心的な形象につきそっている。この副次的な形象は、「ぬすつとといわれることをきらう少女のそぼくな心」を主題として、それは、主要な主題とつながりがないようである。しかし、これらの主題は、それが表現している「理想」という観点からみるなら、はっきりしたつながりがある。

学習の段階	文学作品の内容	
知覚 感性的な認識	形象	
	ことがら	感情＝評価的な態度
理解 理性的な認識	主題	理想
表現よみ	感性と理性との完全な統一	

(一)

「主題」というのは作品のなかにえがかれている人間の生活現象の本質をさす用語である・・・。

本質というものは、ものごとの質を規定する基礎であり、多を一に統一する、ものごとの一般的な側面なのである。また、おなじ質のものごとのなかに本質はくりかえすのであるから、おなじグループの現象にとってそれは法則としてあらわれる。

文学作品の主題をあきらかにすることは、そこにえがかれている人間の生活現象の質規定的な、一般的な側面、その法則性をあきらかにすることにほかならないのである。

えがかれている生活現象からその本質をぬきとることの可能性、意味は、文学作品の内容の基本的な特徴をあきらかにしなければ、はっきりしてこないだろう。

文学作品の内容が人間の生活現象を具体的なすがたにえがきだしているから、それを形象とよんでいる。したがって、**形象**というものを、**人間の生活現象の認識の感性的な形態**であると規定できるだろう。

文学作品を読んで、生活現象の具体的なすがた以上のものを形象からうけとる・・・その生活現象の意味が形象のなかにこめてある。作家は意味のない絵をかかないし、意味のない絵は読者の興味をよびおこさない。

形象に意味があるということは・・・そこにえがかれている生活現象が、その一般的な側面をとおして、読み手の生活、みんなの生活に関係しているからである・・・生活現象の発展の法則を確認することで、読み手に生活の真実をつきつけているからである。形象というものは、同時に、生活現象の一般化の結果であるし、その本質と法則との発見の結果なのである。

作家は、生活現象のなかに法則的にあらわれてくるものを形象のなかにふくめこむ。・・・作家は、個別的な生活現象をえがきだすことで、その本質と法則とをあかすみにだすのである・・・文学作品の内容は・・・形象的な思考の所産なのである。

・・・形象は個別的なものと一般的なもの、現象と本質との統一物であって、その一つがかけると、存在しえないということになる。・・・形象の個別的な側面、したがって具体的な生活現象を「ことがら」とよび、その一般的な側面を「主題」とよんだ。

現象（個別的なもの）は本質（一般的なもの）なしにはありえないし、本質はすべて現象するとすれば、「ことがら」は「主題」なしにはありえないし、「主題」は「ことがら」のなかに現象する。したがって、形象は「ことがら」と「主題」との統一物なのである。

現象は本質の現象であり、本質に規定されているとするなら、作品のなかにえがかれている生活現象は、主題のあらわれであり、主題に規定されているということになる。

・・・主題が形象を媒介にして、現実の生活現象の本質を反映しているということにはほかならない・・・。

・・・作品の主題を子どもに理解させることは、そこにえがかれている生活現象の本質、したがってそれとおなじグループに属する現実の生活現象の本質を理解させることになるのである。文学は現実認識の手段なのである。

・・・主題は、ことばが表現している形象のひろがり（あるいはおおきさ）、形象のもつ表現性を規定していて、作品内容のディテールは主題の方向にそって解釈されなければならない・・・。・・・形象の部分は、まさにそれが主題の表現に奉仕しているために、主題をつかまえることによって、より鮮明に、より具体的に知覚できるのである。ことばを完全な絵と感情におきかえる作業は、主題を理解することなしには不可能だともいえるのである。

文学作品の内容はなによりもまず形象として実在している。したがって、文学の授業がとりくむ対象は形象そのものでなければならない。主題、つまり形象の本質的な部分の理解は、形象を認識する過程における環にすぎないだろう。・・・

・・・主題を生活現象の本質であると理解するなら、主題は、作品にえがかれている生活現象を分析することのほかに、つかまえる方法がない。・・・文学の授業はまず現象の知覚からはじまり、その現象のなかに本質を発見していく過程として組織されなければならない。

・・・人間性の生活現象の一般的な、本質的な側面は、・・・個性的な形象の典型性としてあらわれてくる。文学作品では、個性的な形象をとおして人間の生活現象の一般化、その本質の発見がなされている。文学はひとりの人間についてかたりながら、おおくの人たち（あるいはすべての人たち）に共通の、一般的な特徴をあかるみにだす

だろう。このことを文学理論は典型化といっているが、この典型化こそ人間の生活現象における本質的なもの、法則的なものの発見の芸術的な方法なのである。

形象は現実の直接的な反映ではなく、作家の「理想」にしたがってくみだてられた「理想像」である。

・・・「理想」は「主題」でしめされたものにたいする思想的な態度であり、それは、なによりもまず、人間の生活現象にたいする美的な感情＝評価として、作品のなかに具体的にあらわれている・・・。「主題」は「こうであるもの」を描写しているとしたら、「理想」はその「主題」をとおして「そうでなければならないもの」を表現している。

・・・「理想」は「主題」のそとではあきらかにならないし、「主題」なしには存在しない。はんたいに、「主題」は「理想」なしにはありえない。あしたのことをかたらない思想は存在しないからである。・・・ある思想は、客体的なものの反映としてみれば、「主題」になり、主体的な主張としてうけとめるなら、「理想」になる。と同時に、「理想」は「主題」の発展であって、主題よりもひろい。なぜなら、作品は「主題」をとおして描写している以上のものを「理想」としてかたっているからである。

(二)

文学作品の内容は、・・・形象的にえがかれた人間の生活現象である。いいかえるなら、人々とかれらのあいだにある関係とがえがかれているのである。・・・ひとりの人間をえがこうとすれば、その人間をとりまく情況、かれがとりむすぶ人間関係をえがかないわけにはいかない。人間は一定の関係のなかで人間的な質をかたちづくるし、あらわすのである。

・・・ある人間関係をえがこうとすれば、それをつくりだし、かえていく人間の性格をもえがかないわけにはいかない。・・・文学作品は、人間の性格のみならず、その性格をとりまく情況をもえがいているのである。

・・・ある作品は直接的には性格をえがくことに重点をおいているし、もうひとつの作品は情況をえがくことに重点をおいている。・・・性格と情況とはそれぞれ独自な特質をもっていて、それらが相互にはたらきかけあい、原因＝結果の法則的な関係をつくりだしている。・・・文学作品の分析は、まず、人間と人間関係との分離、性格と情況との分離からはじまるといえるのである。

・・・この人間関係、つまり性格と性格とのぶつかりあいこそ文学作品の構造をなしているといえるのである。・・・人間関係がまさに文学作品の構造をなしているのである。・・・文学作品の構造は、そこにえがかれている人間の結びつき方、人間関係の体系にほかならない。

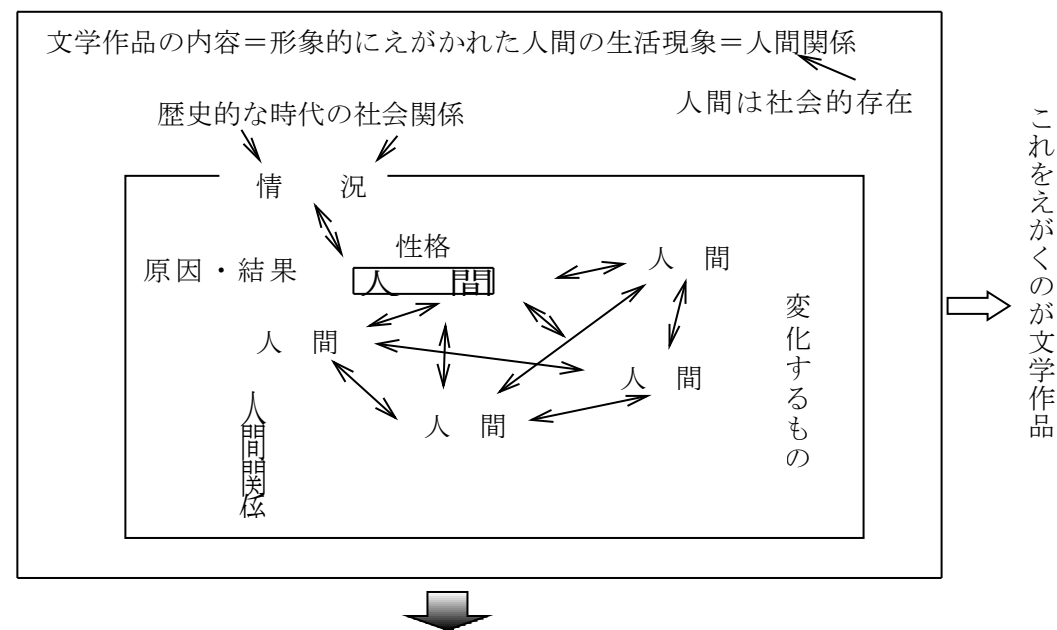
・・・叙事的な作品はこの事件をえがいている。・・・叙事的な文学作品の構造は、平面的にとらえた人間関係ではなく、うつりかわっていく人間関係の体系であるといわなければならない。叙事的な作品の構造の分析は、いちいちの場面における人間関係だけでなく、いくつかの場面の原因＝条件的な結びつきをもあきらかにしなければならない。

・・・ひとつの事件のなかにあるいくつかの場面の、あるいはいくつかの事件の時間的な、原因＝条件的なむすびつきのことを「すじ」とよんでおこう。・・・「すじ」は発展していく人間関係、動的にとらえた人間関係にほかならない・・・。

・・・「すじ」は対立する性格によってひきおこされる事件の体系なのである。したがって、叙事的な作品においては、「すじ」は骨ぐみのようなものであって、いちいちの形象を作品全体に組織するはたらきをなしている。・・・「すじ」は事件を支配する法則（原因＝条件的なむすびつき）をさしだすことによって、人間の生活現象における本質的なものをあきらかにする。つまり、「すじ」はそうすることで主題と理想とを表現しているのである。・・・

(未完)

* これからは、わたし (sakuwa) による、乱暴なまとめである。



文学作品の分析は、まず、人間と人間関係の分離、性格と状況との分離

文学作品の構造

(人間関係＝性格と性格とのぶつかりあい) が文学作品の構造をなしている

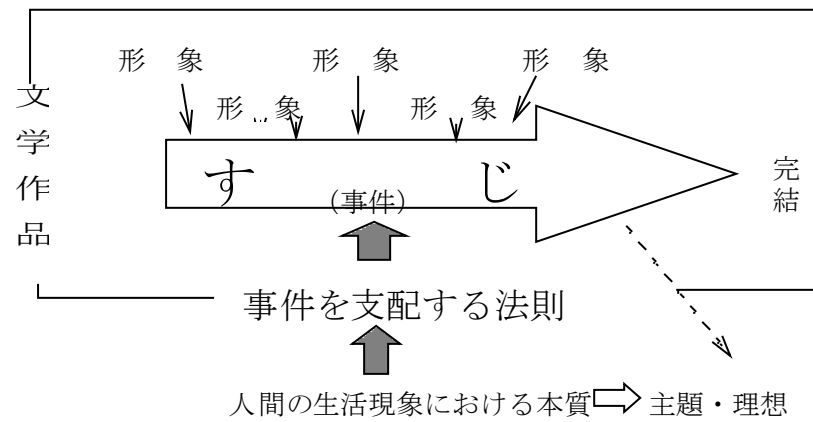
- ↳ 構造＝構成要素がとりむすぶ関係の体系
- ↳ 文学作品の構成要素＝ひとりひとりの人間
- ↳ 文学作品の構造＝人間の結びつき方、人間関係の体系

叙事的な作品～性格の対立から生じる事件の展開するさま

- 〃 の構造～うつりかわっていく人間関係の体系
- 〃 の分析～いくつかの場面の人間関係の原因＝条件的な結びつきも明らかにしなければならない

「すじ」＝ひとつの事件のなかにあるいくつかの場面の、あるいは、いくつかの事件の時間的な、原因＝条件的なむすびつき。

対立する性格によってひきおこされる事件の体系



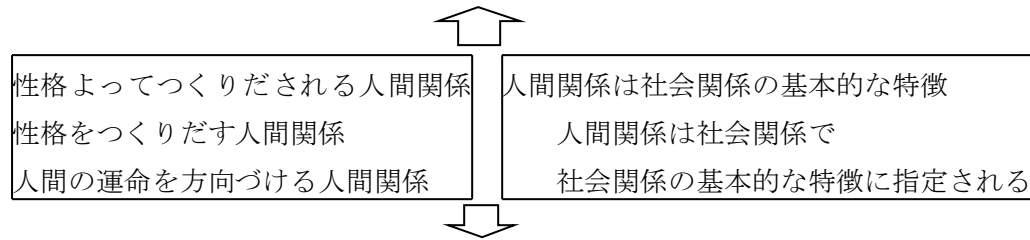
「すじ」の機能について

- (1) 事件の発展をとおして、人間の性格をあかすみにだす (性格の基本的な特徴)
- 事件の展開過程をとおして、典型的な性格をさしだす。

登場人物の性格の分析 → [人間の本質 = 社会の本質
歴史的な時代の社会関係の基本的な特徴]

- (2) 人間の性格の形成の歴史をあきらかにする
 - 事件が性格をつくりだす
 - 典型的な状況における典型的な性格
- どのような状況のなかで
どのように成長し
どのように変化したか

- (3) 特定の歴史的な時代の社会関係の基本的な特徴をあかすみにだす

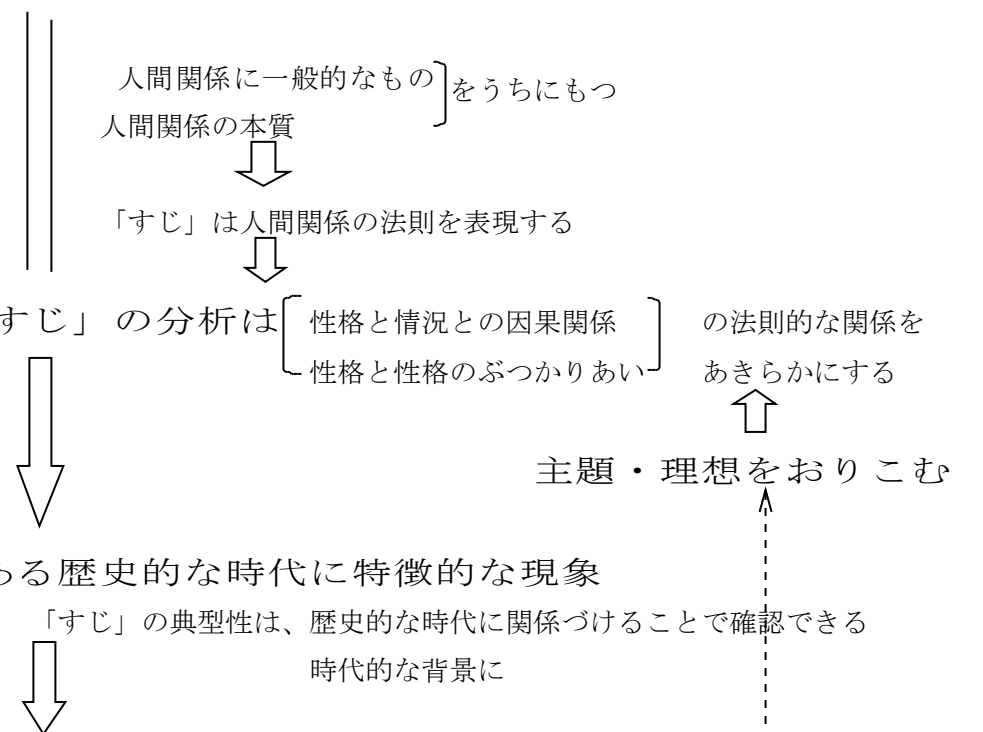


社会関係の本質が人間関係のなかに現象する

- 事件は時代の現象の典型

(1) (2) (3) が正しいなら

「すじ」は典型的でなければならない



「すじ」の分析だけでは、主題ははっきりしてこない

「すじ」を構成している部分

はじまり：事件がおこる場面の描写。事件が発生する情況。人物登場。

おこり：事件そのものの発端。

おこりの機能：人間の生活と人間関係とに変化をもたらす重大な事件をさしだしながら、そのことによって、生活上のアクチュアルな問題をなげだす。

つづき：「おこり」であたえられた事件から、ひきつづいておこるいくつかのできごとをえがきながら、事件にまきこまれた人たちの生活と関係とにおける変化を示す。

事件がどのようにして決定的なモメントへみちびかれていくかしめされている。

やま：対立する性格のぶつかりあいが、もっとも緊張する場面。

事件の解決の一定の方向性を示す。

もっともあざやかに人間の典型的な性格があかるみにでる。

主題が決定的な表現を受ける。

おおづめ：事件の発展の結果もたらされた情況。

えがかれた事件にたいする、その事件のなかで活躍する人物にたいする、思想的な態度、理想をしめしている。

もうひとつのすじの「はじまり」にもなる

説明部：登場人物の成果の説明、性格形成の状況の説明、社会環境の説明

プロローグ：まえがき。これからえがく事件を予告し、主題・理想を提示することにある。

エピローグ：あとがき。基本的な事件がおわったあとにおこったできごと。「おおづめ」のあとの主人公の生活状態がえがかれていて、「おおづめ」とのあいだには、時間的な間隔がある。基本的な事件にたいする思想的な態度、理想が表現されている。

エピソード：さしこみ。基本的な事件に原因＝結果的なかかわりをもたないが、主題＝理想の表現を補強している。

自然の形象：人間の生活、事件が進行する背景をなして、性格と状況との描写をたすけるばかりではなく、作品のもつ情緒的なひびきをつよめる。

物の描写：主人公の性格を特徴づける手段。

私の発言：作家の感情や思想を書いて、直接、読み手にはたらきかける。

わく：えがかれる事件の語り手を特徴づける。

*少しでも興味がわいたら、ぜひ、原典にあたってください。